本書の意図は，水族館が，水生生物の保護や研究，教育啓発活動を担う総合的な生涯学習機関であることを読者に認識してもらうことにあるという．たしかにその意図は果たされていると思うが，私はそれ以上に，水族館で働きたいという希望をもつ人が水族館の可能性や水族館で働くことの現代的な意義をさらに深く考えるための貴重な情報源のひとつになっていると思う．本書は，水族館で働く魅力を生き生きと読者に語りかけてくる．水族館に勤務している全ての人が自分の望む仕事を担当できるわけではないだろうが，希望業務を担当することができれば，情熱次第でかなりのことができることが読み取れる．そういった意味で，水族館に興味のある読者はもちろんのこと，水族館勤務を望む人にとくにお勧めしたい．

最後に，編者によれば，水族館での様々な研究活動に焦点を絞った姉妹書の出版を準備中であるという．そちらの出版も楽しみに待ちたい．

（荒山和則　Kazunori Arayama: 〒311-3512 茨城県行方市玉造甲1560　茨城県内水面水産試験場　e-mail: arakichi@ignaisuishi.ecnet.jp）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
55(2): 150

水辺の小わざ．—「水辺の小わざ」プロジェクトチーム（著）（濱野龍夫・伊藤信行，編）．2007．山口県土木建築部河川課，山口．256 pp．2,500円（税込・送料別）．本書は，独立行政法人水産大学校の濱野氏と山口県土木建築部河川課の伊藤氏を中心とした「水辺の小わざ」プロジェクトチームの2年間の成果を纏めたもので，河川の生態系を保全復元するための山口県版，安価な工法・工夫事例集である．それにとどまらず，河川区分，水質，生物，環境，漁業などの解説を加え，総合的な川のハンドブックとなっている．「小わざ」ながら，いい所の拾い取りをできるものが少なくないはず．山口県土木建築部によるサイト http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a18600/kawadukuri/kowaza.html または水産大学校研究室HPのサイト http://www2.fish-u.ac.jp/LAIZ/topics/kowaza/に解説と申込方法，申込用紙があるので，ファクスにて山口県刊行物普及協会（083-923-9139）に申し込む．（酒井治己）

種を記載する—生物学者のための実際的な分類手順—．—ジェディス E. ウィンストン（著），馬渡峻輔・柁原　宏（訳）．2008．新井書院，東京．653 pp．ISBN978-4-903981-00-0．7,800円（税別）．本書は1999年に出版されたJudith E. Winstonの「Describing species: practical taxonomic procedure for biologists」の訳本で，「序論」，「種を認識する」，「種の記載の執筆」，「種の記載を超えて」の4部から構成されている．本書では新種記載の基本的な手順を，新種の発見から文献調査，分類学的考察，記載，そして出版にいたるまで丁寧に説明してある．記載例では原書の英文を残して日本語の記載と対応させているため，実際の記載方法が理解しやすい．また，最終部「種の記載を超えて」には「亜種」・「属レベルの記載とリビジョン」・「検索表」などの章が設けられ，単なる種の記載を超えた，発展的な内容が含まれる．各章の参考文献は事項別にまとめられ，インターネットのサイトなども紹介されている．したがって，必要な情報に容易にアプローチできる．種の記載の実際が基礎から応用まで理解でき，分類学に携わる学生にはおすすめの1冊である．（片山英里）

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
55(2): 150–152

新知見紹介

有明海で採集されたコウライマナガツオ
Pampus echinogaster caught in Ariake Sound, Kyushu

写真の魚（図1）は，有明海奥部の六角川河口で“あんこう網”（潮待ち網の一種）を操業する佐賀県白石市（旧小城郡芦刈町）在住の陣川武彦氏によって1999年9月28日に漁獲された，尾叉長301 mmのコウライマナガツオ *Pampus echinogaster* である．同氏から，マナガツオ *Pampus punctatissimus* とは形態の異なる類似種がときおり漁獲されることを聞き，確認のため標本採集を依頼した筆者の一人の求めに応じて提供されたものである．この標本は，中坊 (2000) がコウライマナガツオの特徴として記しているとおり，波状のリッジ域が後頭部にしか形成されていない．また，有明海で多く漁獲されるマナガ

図1. 有明海奥部六角川沖で1999年9月28日に採集された尾叉長301 mmのコウライマナガツオ.

ツオに較べ，下顎が明らかに小さいことでも同定は容易である.

陣川氏はマナガツオと明らかに異なるマナガツオ類稚魚も漁獲し，標本の提供を受けた佐賀県有明水産振興センターが，「マナガツオと異なる種のマナガツオ科魚類の稚魚」として報告している（鷲尾ほか，1996）．さらに，同氏から提供された成魚の標本処理に当たった同センターの当時の研究員が卵巣の成熟を確かめた．提供された稚魚は，すでに成魚の形態に近い段階にまで成長を遂げており，その形態に種の特徴が表れていたことからコウライマナガツオと同定したが，これらの事実は報告されていない（鷲尾真佐人氏私信）．残念なことに，いずれの標本も当事者の配置が転換された後に処分され，残っていない．陣川氏によると，コウライマナガツオは成魚・稚魚ともに近年は漁獲されなくなっている．筆者らは2006年の6・7月に数回の市場調査を行い，2007年にあんこう網の便乗調査を行ったが，マナガツオしか確認されず，コウライマナガツオを見ることはなかった．本標本は，国立科学博物館に所蔵されている（標本番号：NSMT-P91169）.

有明海の地方名で“まながた”と呼ばれるマナガツオは，有明海の主要な漁獲対象種で，主に6–8月に成熟個体が“まながた網”という伝統的な“流し刺網”で漁獲されるほか，定置網でも漁獲されている．成魚はそれ以外の季節には有明海でごくまれにしか漁獲されないことと，例年8・9月に稚魚が湾奥部の河口域で漁獲されること（田北ほか，2003）から，湾外から産卵のために有明海に来遊し，産卵後，湾外に去る産卵回遊を行っていると考えられている（田北，1980）．しかし，これまでに有明海内でマナガツオの卵と仔魚の分布調査は行われてなく，産卵場も特定されていない.

コウライマナガツオは渤海から東シナ海に至る海域に生息している（山田ほか，2007）．わが国の周辺海域における生息や定常的な出現は知られていないが，青森県下北半島で僅かな個体の一時的な出現は記録されている（野村・塩垣，1992）．有明海における本種の出現は，他海域における記録と同様に，長江からの大規模な出水という偶発的な条件で卵や仔稚魚が大陸沿岸から流された結果という考えがある（山田ほか，1998）．しかし，成熟個体と稚魚が過去には例年のように有明海で漁獲されていたことが観察力に優れた漁業者や現場の研究機関で言われており，マナガツオ産卵群の来遊は現在も続いている．このような事実から見ると，有明海におけるコウライマナガツオの出現は大陸沿岸からの偶発的な移送によるものではなく，小規模ながら産卵個体が湾外から来遊したもので，それが少なくとも1990年代終わりまで続いた後，何らかの状況の変化で途絶えたと筆者らは考えている.

有明海にはわが国の他海域にはいない7種の特産魚が分布する．それらは，いずれも主に湾奥部の浅海と干潟およびその海域に流入する河川の感潮域に生息する．そのような特産魚種以外にも，コイチ *Nibea albiflora* (Menezes et al., 1990) やスズキ *Lateolabrax japonicus*（横川，2002）は，同種が国内に分布してはいるものの，遺伝的に特異な存在であることが分かっている．シログチ *Pennahia argentata* は，わが国沿岸に広く分布しているが，有明海及び隣接の橘湾（別名，千々石湾）に分布する系群は，他の海域の同種と異なる系群である (Yamaguchi et al., 2004)．これら3種は，特産魚種に準じて扱うべき貴重な存在であるが，繁殖や越冬のために有明海内または有明海と隣接の海域を広く回遊する点で特産7魚種と異なっている．コウライマナガツオは，わが国の海域の中で有明海のみに来遊し産卵していた可能性が考えられ，特産種7種とも上記の準特産3種とも異なるタイプの特産種と言える存在であったのではないだろうか.

引用文献

Menezes, M. R., N. Taniguchi and S. Seki. 1990. Degree of intraspecific genetic divergence and variability in three sciaenid species. Japan. J. Ichthyol., 37: 39–48.

中坊徹次．2000．マナガツオ科．中坊徹次（編），pp. 961–962. 日本産魚類検索．東海大学出版会，東京.

野村義勝・塩垣　優．1992．下北半島牛滝産魚類目録補訂—1. 青森県水産増殖センター研究報告，7: 1–7.

田北　徹．1980．有明海の魚類．月刊海洋科学，12: 105–115.

田北　徹・小村大樹・川原逸朗・森　勇一郎・中島則久・伊藤史郎．2003．有明海奥部佐賀海域における魚類の分布生態．佐賀県有明水産振興センター研究報告，21: 81–98.

山田梅芳・大坂幸男・林　宗徳．1998．日本初記録種テナガミズテングの国籍を尋ねる．西海水研ニュース，92: 6–12.

山田梅芳・時村宗春・堀川博史・中坊徹次．2007．東シナ海・黄海の魚類誌．東海大学出版会，秦野．1262 pp.

Yamaguchi, A., G. Kume, T. Higuchi and T. Takita. 2004. Geographic variation in the growth of white croaker, *Pennahia argentata*, off the coast of northwest Kyushu, Japan. Env. Biol. Fish., 71: 179–188.

横川浩治．2002．東アジアのスズキ属魚類．田中　克・木下泉（編），pp. 160–173．スズキと生物多様性—水産資源生物学の新展開．恒星社厚生閣，東京.

鷲尾真佐人・有吉敏和・野口敏春．1996．有明海湾奥部の魚

類相．佐賀県有明水産振興センター研究報告，17: 7–10.

（田北　徹　Toru Takita: 〒852–8063 長崎市北栄町18–8 e-mail: t-takita@knd.biglobe.ne.jp；山口敦子Atsuko Yamaguchi: 〒852–8521 長崎市文教町1–14　長崎大学水産学部）

魚類学雑誌
55(2): 152

編集委員会からのお知らせ

「魚類学雑誌投稿規定」の改訂

「2．投稿論文の内容」がより個別具体的になりました．改訂版では関連分野を列記しています．ご参照ください．

「原稿作成上の注意」の変更

「3．学名とその著者名」に変更があります．「学名は原稿ではイタリック体にせず，下線を引いて示す」が「学名は原稿ではイタリック体または下線を引いて示す」に改められました．

*Ichthyological Research*への電子投稿・査読システムの導入

2009年1月より*Ichthyological Research*で電子投稿・査読システムの運用を開始いたします．電子投稿・査読システム (Editorial Manager) 導入後，論文の投稿・査読過程はすべてweb上のシステムで管理されます．ご自分が投稿した論文の情報はEditorial Managerにアクセスすれば，どこからでもご確認いただくことができるようになります．2009年1月以降，*Ichthyological Research*への投稿は，Editorial Managerをご利用ください．

訂正とお詫び

魚類学雑誌55巻1号の目次に誤りがあります．本論文3番目のタイトルに「ウマズラカワハギ」とありますが，これは誤です．「ウマヅラハギ」が正です．訂正し，お詫び申し上げます．

会記・Proceedings

魚類学雑誌
55(2): 152–155

2009年度年会のお知らせ

2009年度年会の予定をお知らせします．詳細は2009年5月に出版される魚類学雑誌56巻1号に掲載します．

期　日：2009年10月9日（金）–10月12日（月）
　　9日　編集委員会・評議員会
　　10–12日　研究発表会・シンポジウム
会　場：東京海洋大学品川キャンパス
　　〒108–8477 東京都港区港南4–5–7

シンポジウム・セッションの申し込みについて

2009年度年会でシンポジウムまたはセッションを計画されている会員は下記の要領で申し込み書類を作成し，電子メールで事務局までお送りください．会場および日時の制約上多数の申し込みがある場合には調整を計りますので，あらかじめご了承下さるようお願いします．セッションの主旨については魚類学雑誌45巻2号の会記を参照してください．

なお，2009年度のシンポジウム・セッションは，10月12日（月）の午後のみとなりますので，ご注意ください．

申 込 先：〒759–6595 下関市永田本町2–7–1
　　水産大学校生物生産学科
　　日本魚類学会庶務幹事　高橋　洋
　　TEL: 083–286–5111　FAX: 083–286–7435
　　e-mail: hiroshi@fish-u.ac.jp
必要事項：(1) 和文標題，(2) 英文標題，(3) 企画者氏名，(4) 趣旨説明（1000字以内），(5) 演者と演題，(6) 連絡先住所・氏名（電話，ファックスおよびe-mail）．なお，標題や演者・演題は暫定案でも結構ですが，内容が明瞭にわかるようにして下さい．ただし，実施時の内容と大きく異なる暫定案を作成することは避けて下さい．
申込締切：2009年1月31日

2008年度年会

2008年度年会が2008年9月20日（土）–9月23日（火・祝）に愛媛大学城北キャンパスにおいて開催され，以下の会合があった．